

源氏續本 帯本の巻二



大和田建樹八校訂

源氏讀本

第木の卷二

東京

跡見女学校藏版



第木の卷大要

源氏の君十七歳の夏の事なり。桐壺と第木との間に十三歳より十六歳までの事ありたるものと想像すべし。此卷にては既に中將の官を帯びたり。今この讀本に撰びたるは第木の卷の中の雨夜の品定といふ一段にて其以下は暫く省きぬ。雨夜の品定に出でたる人々は左の如し。

源氏の君

官は中將。

頭の中將

桐壺の卷にて藏人少將といひたる人。

左馬頭

系圖なし。

藤式部丞

これも。

伊勢物語
春日野の若
紫のすりの衣
しのぶの乱れ
すれ限しられ

源氏讀本貳 帚木の卷

大和田建樹校訂

光る源氏。名のみことくしう。いひけたれ給ふことがたほかな
るに。いごぐかゝるすきごごぐもを。末の世にも聞き傳へて。か
ろびたる名をや流さんご。忍び給ひけるかくろへごごをさへ。語
り傳へけん人の物言ひ。さがなさよ。さるは。いごいたく世をは
ぐかり。まめたち給ひけるほごに。なよびかにをかき事はなく
て。交野の少將には笑はれ給ひけんかし。
また中將なごにももの給ひし時は。内にのみさぶらひようし給
ひて。たほいごのにはたねくまかんで給ふを。しのぶのみたれ
やと疑ひ聞ゆることもありしかご。さしもあためき目馴れたる。
うちつけのすきくしさなごは。このまゝからぬ御ほんじやうに

て。稀にはあながちに引きたがへ。心づくしなることを。御心に
たぼしごむる癖なんあやにくにて。さるまじき御ふるまひも
ちまじりける。

長雨はれまなきころ。内の御物忌さしつゞきて。いとゞ長居さぶ
らひ給ふを。たほいごのには覺束なくうらめしご思したれご。萬
の御よろひ。何くれごめづらささまに調じ出で給ひつゝ。御む
すこの公達。唯この御ごのゐごころの官仕を勤め給ふ。

宮腹の中將は。中に親しく馴れ聞に給ひて。遊びたはぶれをも。
人よりは心やすく。あれくくふるまひたり。右のたごのい
たはりかづき給ふすみかは。この君もいごものうくして。すさ
がまきあた人なり。里にても。我かたのつらひまばゆくして。
君のいでいり給ふに。うちつれ聞に給ひつゝ。よるひる學問を
もあろびをも諸共にして。をさく立ちたくれず。いつくにても

まつはれ聞に給ふほごに。たのづからかしこまりをもたかず。心
の内に思ふことを隠しあへずなん。むつれ聞に給ひける。

つれづれ降りくらしめてあめやかなる宵の雨に。殿上にもをさを
さ人ずくなに。御ごのゐごころも。例よりはのごやかなる心地す
るに。おほごなぶら近くて。書ごもなご見給ふついでに。近き御
厨子なる。いろくの紙なる文ごもをひき出で。中將わりなく
ゆかしがれば。さりぬべき少しは見せん。かたはなるべきもころ
ごゆるし給はねば。うのうちごけて。かたはちいたご思されん
ころゆかしけれ。たなべたる大かたのは。數ならねご。ほごほご
につけて書きかはしつゝも見侍りなん。たのがじうらめしき折
々。待顔ならん夕暮なごのころ。見所はあらめご。ゑんずれば。
やんごごなくせちに隠し給ふべきなごは。かやうにたほごうなる
御厨子なごに。うち置きちらし給ふべくもあらず。深く取り隠し

給ふへかんめは。これは二のまの心やすきなるべし。
片端づゝ見るに。かくさまぐなるものどもこゝろ侍りけれこて。
心あてに。うれか彼かなご問ふ中に。言ひ當つるもあり。もては
かれたる事を思ひよせて。疑ふもをかこ思せご。言ふなにて。
ごかくまぎらはしつゝ取り隠し給ひつ。
うこにこゝろ多くつごへ給ふらめ。少し見ばや。さてなんこの厨子
も心よく開くべき。このたまへは。御覧じ所あらんこゝろ難く侍ら
め。なご聞に給ふついでに。女のこれいもご難つくまじさは。難
くもあるかなご。やうくなん見給へ知る。唯うはへはかりのなさ
けに。手はしりかさ。をりふのいらへ心にてうちしなごはかり
は。ずるぶんによろしきも多かり見給ふれご。うも誠にうの方
を取り出でんらびに。必るまじきはいごかたや。我心得
たる事はかりを。たのじ、心をやりて人をはたごめ。かたは

らいたき事多かり。親なご立ち添ひもてあがめて。たひさきこも
れる窓の内なる程は。唯片かごを聞き傳へて。心動かす事もあ
めり。かたちをかしくうちごき。若やかにてまぎるゝ事なき
程。はかなさすさびをも。人まねに心を入るゝ事もあるに。たのづ
から一つゆゑづけてし出づる事もあり。見る人たくれたる方をば
言ひ隠し。さてありぬべき方をはつくろひてまび出たすに。う
れしかあらじご。うらにいかゝは推しはかり思ひくたさん。誠か
ご見もて行くに。見劣りせぬやうはなくなんあるべきご。うめき
たるけしきも耻かしけなれば。いごなべてはあらねご。我も思
あはするこゝろやあらん。うちほゝゑみて。うの片かごもなき人は
あらんやこの給へは。いごさばかりらんあたりには。誰かはす
かされより侍らん。取る方なく、ちをきゝはご。いうなりご覺
ゆばかりすぐれたるごは。數ひごゝこゝろ侍らめ。人の品たか

く生れぬれば。人にもてかゝづかれて隠るゝ事も多く。じねんに
うのけはひこよなかるべし。中の品になん、人の心々。たのがじ
ゝの立てたる趣も見ゆて。わかるべき事かたゞ多かるべき。下
のきざみこいふきはにあれば。殊に耳たゞずかして。いこ隈なけ
なるけしきなるもゆかして。うの品々やいかに。いづれを三つ
の品にたきてか分くべき。もとのしなたかく生れながら身は沈
み。位みじかくて人けなき。又なほびこの上達部をござまなりの
ぼりたる。我はがほにて家の内を飾り。人に劣らじと思へる。う
のけぢめをばいかゞ分くべきと。問ひ給ふ程に。左の馬の頭。藤式
部の丞。御物忌にこもらんこて参れり。世のすきものにて物よく
言ひ通れるを。中將待ちこりて。この品々辨へ定め争ふ。いこ聞
きにくき事多かり。
なりのぼこも。もこよりさるべきすぢならぬは。世の人の思へ

る事も。さはいへど猶ことなり。又もこはやんここなき筋なれど
世にふるたづきすくなく。時世うつろひて。たばね衰へぬれば。
心は心こして事足らず。わろゝたる事ども出でくるわざなんめれ
ば。こりぐゝにここわりて中の品にぞ置くべき。
受領こいひて。人の國の事にかゝづらひいこなみて。品定まりた
る中にも。又きざみくありて。中の品のけしうはあらぬ。ゆり
出でつべき頃ほひなり。なまぐゝの上達部よりも。非参議の四位
ごもの。世のたばねくちをいからず。もとの根こい賤しからぬ
が。安らかに身をもてあふるまひたる。いとかはらかなりや。
家の内に足らぬ事なごはたなかんめるまゝに。はぶかすまばゆき
までもてかゝづけるむすめなどの。たこいめ難くたひ出づるもあ
またあるべし。宮仕に出で立ちて。思もかけぬ幸とり出づるため
いごも多かりか。なごいへば。すべてにぎはしきによるべき

なんなりとて。笑ひ給ふを。ここ人のいはんやうに心得ず仰せらるゝこて中將にくむ。

このいな時世のたばはうちあひ。やんごこなきあたりの。内々のもてなくけはひたくれたらんは。更にもいはず。何をしてかく生ひ出でけんこ。いふかひなく覺ゆへ。うちあひてすぐれたらんもここわり。これころはさるべき事こたばねて。めづらかなる事こ心も驚くまじ。なにがしが及ぶべき程ならねば。上か上は打ち置き侍りぬ。

さて世にありこ人に知られず。さびしくあばれたらん葎の門に。思の外にらうたけならん人の閉ぢられたらんころ。限なくめづらしくは覺ゆめ。いかではたかゝりけんこ思ふより違へる事なん。怪しく心とまるわざなんべき。父の年老い。物むつかしげにふこりすぎ。せうこの顔にくげに。思ひやり異なる事なき閨の

つらう人か

内に。いこいたく思ひあがり。はかなくいそでたる事わざも。故あからず見わたらん片かごにても。いか思の外にをかしからざらん。すぐれて疵あき方のねらびにころ及ばざらめ。さるかたにて捨て難き物をばこて。式部を見やれば。我妹ごものよろしき聞にあるを。思ひての給ふにやこや心得らん。物も言はず。いでや上の品ご思ふにたに難けなる世をこ。君はたぼすべし。白き御ごものあよゝかあるに。直衣ばかりをしごけあく着あし給ひて。紐あごも打ち捨てゝ。ろひ臥し給へる御火影。いごめめでたく。女にて見奉らまほし。この御爲には。上か上をねりいでゝも。猶あくまじく見給ふ。さまざまの人のうへごもを語りあはせつゝ。大方の世につけて見るにはごがなきも。我物ご打ち頼むべきを撰ばんに。多かる中にもねなん思ひ定むまかりける。男のねほやけにつかうまつり。

古今集
とへにどて
どすればか
かりかくす
ればあない
ひしらすあ
ふささるさ
に

はかしくしき世のかためなるべきも。誠のうつはものごなるべき
を取り出たさんには。かたかるべしかし。されどかこしこしてても。
一人二人世の中をまつりごちしるべきならねば。上は下に助けら
れ。下は上に靡きて。事廣きにゆづろふらん。狭き家のうちのある
じごすべき人ひごりを思ひめぐらすに。たらはであしかるべき大
事ごもなん。かたぐいほかる。ごあればかゝりあふささるさに
て。なのめにしてもありぬべき人の少なきを。すきぐしき心の
すさびにて。人の有様をあまた見あはせん好ならねど。ひごへ
に思ひ定むべきよるべごすばかりに。同じくは我ちからいりをし。
直しひきつくろふべき所なく。心になふやうもやご。ねりろめ
つる人の定まり難きなるべし。
必しも我思ふにかなはねど。見ろめつる契ばかりを捨て難く思ひ
こまる人は。物まめやかなりご見ぬ。さてたもたるゝ女の爲も。心

にくゝたしはからるゝなり。されど何か。世の有様を見給へ集む
るまゝに。心に及ばずいごゆかしき事もなしや。きんたちの上な
き御ねらびには。ましていかばかりの人かはとぐひ給はん。所せ
く思ふ給へぬたに
かたちきたなげなく若やかなる程の。れのがじゝは塵も附かじご
身をもてなし。文を書けごたほごかに。ここねりをし。つさほ
のかに心もごなく思はせつゝ。又さやかにも見てしがなごすべな
く待たせ。わづかなる聲聞くばかり言ひよれど。息の下に引き入
れ。言ずくなゝるが。いごよくもてかくすなりけり。なよびかに
女しご見れば。あまりなさけにひきこめられて。ごりなせばあた
めく。これを初めの難ごすべし。
事が中になのめなるまじき人のうしろみの方は。物のあはれ知り
すぐし。はかなきついで情あり。をかしきに進める方なくても

よかるべし。見わたるに。又まめくしきすぢを立て。耳はさ
みがちにびさうあき家さうじの。ひこへにうちこけたるうしろみ
ばかりをして。朝夕の出で入りにつけても。たほやけわたくしの人
のたゞずまひ。善き悪しき事の目にも耳にもこまる有様を。疎き
人にわざさうちまねはんやは。近くて見ん人の聞きわき思ひ知る
べからんに。語りもあはせばやこ。うちも笑まれ。涙もさしく
み。もしはあやあきたほやけばらたしく。心ひこつに思ひあまる
事さごたほかるを。何にかは聞かせんと思へば。うち背かれて。人
知れぬ思ひいでわらひもせられ。あはれこもうちひこりごたる
に。何事さごあはつかにさしあふぎ居たらんは。いかゞはくち
をしからぬ。

唯ひたぶるにこめきてやはらかならん人を。こかくひきつくるひ
てはなごか見ざらん。心もこなくこも直し所ある心地すべし。け

にさし向ひて見ん程は。さてもらうたき方に罪ゆるし見るべき
を。立ち離れてはさるべき事をもいひやり。折節にしいでんわざ
の。あたごこにもまめごこにも。我心と思ひ得る事さく深きいた
りなからんは。いこくちをし。たのもしげあきごがや。猶苦し
からん。常は少しうばくしく心づきあき人の。折節につけてい
でばぬするやうもありかしあご。隈あき物いひも定めかねて。い
たく打ち歎く。

今は唯しあにもよらじ。かたちをば更にもいはじ。いこくちをし
ねぢけがましきたばねたにあくは。唯ひこへに物まめやかに。静
ある心のたもむきあらんよるべを。つひのたのみ所には思ひ置
くべかりける。あまりのゆゑよし心ばへうち添へたらんをば。よ
ろこびに思ひ。少したくれたる方あらんをも。あながちに求め加
へじ。うしろやすくのぞけき所たにつよくは。うはべのあさけは

たのづからもてつけべきわざをや。
 ぬに物耻して。恨みいふべき事をも見知らぬさまに忍びて。うへはつれなくみさをづくり。心一つに思ひ餘る時は。いはんかたなくすこき言の葉。あはれある歌をよみ置き。忍ばるべきかたみを留めて。深き山里。よばれたる海づつをぞに。はひ隠れぬかし。
 童に侍りし時。女房あごの物語讀みしを聞きて。いごあはれになく。心深き事かな。涙をさへあんたごし侍りし。今思ふには。いご輕々しく。事さびたる事なり。志深からん男を置きて。見る目の前につらきことありとも。人の心を見知らぬやうに。逃げ隠れて人を感はし。心をも見んごする程に。長き世の物思ひになる。いごあぢきなき事なり。
 心深しやあごほめたてられて。あはれ進みぬれば。やがて尼にな

りぬかし。思ひ立つ程は。いご心澄めるやうにて。世にかへりみすべくも思へらず。いごあな悲し。かくはた思しなりにけるよなごやうに。あひ知れる人來ごぶらひ。ひたすらにうしごも思ひ離れぬ男。聞きつけて涙たごせば。使ふ人古御達あご。君の御心はあはれありけるものを。あたら御身をあごいふに。みづから額髪をかきさぐりて。あへなく心ぼろければ。うちひろみぬかし。忍ぶれご涙こぼれろめぬれば。折々ごごにね念しぬず。悔しき事も多かんめるに。佛もなか／＼心ぎたあしご見給ひつべし。にごりにしめるほごよりも。あまうかびにては。かへりて悪しき道にもたゞよひぬべく覺ゆる。
 絶ぬすくせ淺からで。尼にもあさで尋ねごりたらんも。やがてろの思ひいで。うらめしきふしあらざらんや。悪しくも善くもあひろひて。ごあらん折もか、らんきざみをも。見過したらん中こ

う。契深くあはれならぬ。我も人もうしろめたく心たかれしやは。又そのめにうつろふ方あらん人を恨みて。けしきばみ背かん。はたをこがましかりせん。心はうつろふ方ありとも。見ろめし志いごほしく思はゞ。さる方のよすがに思ひてもありぬべきに。さやうからんたじろきた。絶ぬぬべきわざあり。すべて萬の事をたらかに。忍んずべき事をば。見知れるさまにほのめかし。恨むべからんふしをも。にくからずかすめあさは。うれにつけてあはれもまさりぬべし。多くは我心も。見る人からをさまりもすべし。あまりむけにうちゆるべ見放ちたるも。心安くらうたきやうあれど。たのづから軽き方にぞ覺に侍るかし。繋かぬ船の浮きたるためしもけにあやかし。さは侍らぬかこいへば。中將うあづく。^{ナユヘ}さしあたりて。をかしこもあはれとも。心にいらん人の。たのもし

けあき疑あらんころ。大事あるべけれ。我心あやまちあくて見過さば。さし直してもあごか見ざらん。ご覺はたれど。うれさしもあらじ。ごも^かくも違ふべきふしあらんを。のごやかに見忍ばんより外に。ます事あるまじかりけりこいひて。我妹の姫君は。このさためにかあひ給へりごれもへば。君のうちねぶりて言葉まぜ給はぬを。さうくしく心やましと思ふ。馬の頭ものさための博士にありて。ひらぎ居たり。中將はこのこごわり聞きはてんど。心に入れてあへしらひ居給へり。萬の事によろへてたばせ。木の道のたくみの萬の物を心に任せて作り出たすも。臨時のもてあろびもの。ろの物ご跡も定まらぬは。ろはつさざればみたるも。けにかうもしつべかりけりご。時につけつゝさまをかへて。今めかしきに目うつりて。をかきもあり。大事ごして。誠にうるはしき人の調度のかざりごする。定ま

れるやうあるものを。難なくしいづる事なん。猶誠の物の上手は。さまことに見ねわかれ侍る。
 又繪所に上手多かれど。墨がきに撰ばれて。次々に更に劣り優るけぢめ。ふごしも見ねわかれず。かゝれど。人の見及ばぬ蓬萊の山。荒海のいかれるいをのすがた。唐國のはけしきけたものゝかたち。目に見ねぬ鬼の顔なごの。たごろくしく作りたる物は。心にまかせて一きは人の目を驚かして。じちには似ざらめど。さてありぬべし。よのつねの山のたゝすまひ。水のながれ。目に近き人の家居有様。ゆにご見ね。なつかしくやはらびたるかたなごを。靜にかさませて。すくよかならぬ山のけしき。こぶかく世離れてたゝみなし。けちかき籬の内をば。ろの心しらひたきてなごをなん。上手はいごいきほひ殊に。わるものは及ばぬ所多かんめる。

手を書きたるにも。深き事はなくて。こゝかしこの點ながにはしりがき。ろこはかこなくけしきばめるは。うち見るにかごくしく。けしきたちたれど。猶誠のすぢを細やかに書き得たるは。うはへの筆消ねて見ゆれど。今一度ごりならべて見れば。猶じちにかんよりける。

はかき事たにかくころ侍れ。まして人の心の。時に當りてけしきはめらん見る目のなさをば。ね頼むまじく思う給へ侍る。ろの始の事。すきくしくとも申し侍らんごて。近く居よれば。君も目さまし給ふ。中將いみじく信じて。つらづるをつきてむかひ居給へり。法の師の世のこごわり説き聞かせん所の心地するも。かつはをかしけれど。かゝるついでは。おのくむつごごもね忍びごめずなんありける。
 はやうまたいご下臈に侍りし時。あはれご思ふ人侍りき。聞ねさ

せつるやうに。かたちなごいごまほにも侍らざりしかば。若き程のすきごちには。この人をごまりにも思ひごめ侍らず。よるべごは思ひながら。さうくしくて。ごかくまぎれありき侍りしを。物ゑんじをなんいたくし侍りしかば。心づきなく。いごかゝらでたいらかあらましかばと思ひつゝ。あまりいごゆるしなく疑ひ侍りしもうるさくて。かく數ならぬ身を見も放たで。なごかくしも思ふらんご。心苦しき折々も侍りて。じねんに心をさめらるゝやうになん侍りし。

この女のあるやう。もごより思ひ至らざりける事にも。いかでこの人の爲にはご。なき手をいたし。たくれたるすぢの心をも。猶くちをしくは見ぬじご思ひ勵みつゝ。ごにかくにつけて。物まめやかにうしろみ。露にても心に違ふ事はあくもがなご。思へりし程に。進める方ご思ひしかご。ごかくに靡き來てなよびゆき。見

にくきかたちをも。この人に見やうとまれんごわりあく思ひつくるひ。疎き人に見ぬばおもてふせにや思はんご。憚り耻ぢて。みさをにもてつけてをるを。見馴るゝまゝに。心もけしうはあらず侍りしかご。唯このにくき方一つあん。心をさめず侍りし。うのかみ思ひ侍りしやう。かうあながちにしたがひおぢたる人あんめり。いかで懲るばかりのわざして。れごして。この方も少しよろしもあり。さがあさもやめんご思ひて。誠にうしあごも思ひて絶ぬぬべき氣色あらば。かはかり我に隨ふ心あらは。思ひ懲りなんご思ひ給へて。殊更になさけなくつれあきさまを見せて。例の腹立ちゑんずるに。かくたがましくは。いみじき契深くごも絶ぬて又見じ。かぎりご思はごかくわりなき物疑ひはせよ。行くさき長く見ぬんご思はご。つらき事ありごも念じて。なのめに思ひありて。かゝる心たに失せあば。いごあはれごあん思ふべき。人

なみくにもあり。少したごあびんに添へて。又並ぶ人なくあんなるべきまご。かしこく教へたつるかあご思ひ給へて。我々けくいひろし侍るに。少しうち笑ひて。萬にみたてあく物けあき程を見過して。人数ある世もやご待つ方は。いごのどかに思ひあされて。心やましくもあらず。つらき心を忍びて。思ひなほらん折を見つげんと。年月を重ねんあひなたのみは。いご苦しくなんあるべければ。かたみに背きぬべきまごみにあんなるご。ねたげにいふ時に。腹たしくありて。にくげある事ごもを言ひはげまし侍るに。女もををさめぬすぢにて。およびひごつを引きよせて。くひて待りしを。れごろくしくかこちて。かゝる疵さへつきぬれば。いよく交らひをすべきにもあらず。はづかじめ給ふめるつかさくらゐ。いごしく何につけてかは人かん。世を背きぬべき身あんめりなご。いひおごして。さらば今日ころはかぎりなん

めれご。このおよびを屈めてまかんでぬ。

手を折りてあひ見しごを數ふれば。これひごつやは君がうきふし。いづらみじまごいひ侍れば。きすがにうち泣き

うきふしを心ひごつに數へきて。こや君が手をわかるべきをり。なごいひしひ侍りしかご。誠にはかはるべき事ごも思う給へずあがら。日ごろふるまで消心もつかはさず。あくがれまかりありくに。臨時の祭の調樂に。夜更けていみじうみぢれ降る夜。これかれまかりあがる所にて。思ひめぐらせば。猶家路ご思はん方は又なかりけり。

内わたりの旅寐もすさまじかるべく。けしきばめるあたりはうろ寒くやご。思う給へられしかば。いかゞ思へるご。けしきも見がてら。雪をうち拂ひつゝまかんで。なま人わろくつめくはるれご。さりごもこよひ。日ごろのうらみは解けなんご。思う給へ

しに。火ほのかに壁に背け。なほたる衣ごものあつごねたる。わ
 ほいなるこにうちかけて。引き上ぐべき物のかたびらをどうち上
 けて。今宵ばかりやご待ちけるさまあり。さればよご心ごりす
 るに。さうじみはなし。
 さるべき女房ごもばかりごまりて。親の家にこの夜さりをん渡り
 ぬるご答へ侍り。いんなる歌もよまず。けしきはめる消息もせで。
 いごひたごもりになさけあかりしかば。あへなき心地して。さ
 があくゆるしあかりしも。我を疎みねご思ふ方の心やありけんご。
 さしも見給へざりし事をれご。心やましきまゝに思ひ侍りしに。
 着るべき物。常よりも心ごめたる色あひし。さまいごあらまほ
 しくて。さすがにわが見捨てん後をさへなん。思ひやりうろろみ
 たりし。
 さりごも絶えて思ひ放つやうはあらじご。思う給へて。ごかくい

ひ侍りしを。背きもせず。尋ね惑はさんごも隠れ忍びず。かゝや
 かしからずいらへつ。唯ありし心ながらは。いなん過すまじ
 き。改めてのごかに思ひならなん。あひ見るべきなごいひしを。
 さりごもに思ひ離れじご。思ひ給へしかば。暫しこらさんの心に
 て。しか改めんごもいはず。いたくつなびきて見せしあひたに。
 いごいたく思ひ歎きて。はかなくなり侍りにしかば。たはぶれに
 く、なん覺は侍りし。ひごへにうち頼みたらん方は。さばかりに
 てありぬべくなん。思う給へ出でらる。はかなきあたごごをも。
 誠の大事をも。いひあはせたるにかひなからず。立田姫ごいはん
 にもつきあからず。たなばたの手にも劣るまじく。ろの方も具し
 てうるさくなん侍りしごて。いごあはれご思ひ出でたり。
 中將ろのたなばたの裁ち縫ふ方をのごて。長き契にぞあぬま
 し。けにろの立田姫の錦には又しくものあらじ。はかなき花紅葉

こいふこも。折節の色あひつきなくはかしくしからぬは。露のはは
なく消ぬぬるわざなり。さるにより難き世ぞは定め兼ねたるぞ
やこ。いひはやし給ふ。

さて又同じ頃まかり通ひし所は。人も立ちまさり。心ばせ誠にゆ
ゑありこ見ぬべく。うちよき走りかき。かいひくつまたこ。手
つき口つき皆たごしからず。見聞き渡り侍りき。見るめも事
もなく侍りしかば。このさがなものをうちこけたる方にて。時々
かくろへ見侍りし程は。いこよなく心ごまり侍りき。

この人うせて後。いかゞはせん。あはれながらも過ぎぬるはかひ
なくて。しづくまかりなるまゝに。少しまばゆく。ぬんにこ
のましき事は目につかぬ所あるに。うち頼むべくは見ぬず。かれ
くゝにのみ見せ侍る程に。忍びて心かはせる人ぞありけらし。
神無月のころほひ月れもしろかりし夜。内よりまかんで侍るに。

ある上人きあひて。この車にあひ乗りて侍れば。大納言の家さま
かりごまらんごするに。この人のいふやう。今宵人まつらんやご
なんあやしく心苦しきごて。この女の家はたよきぬ道なりけれ
ば。荒れたるくづれより池の水かけ見ぬて。月たにやごれるずみ
かを。過ぎんもさすがにてたり侍りぬかし。

もごよりさる心をはせるにやありけん。この男いたくすゝろぎ
て。門近き廊のすのこたつものにしりかけて。ごばかり月見を
る。菊いごたもしろくうつろひ渡りて。風にきほへる紅葉のみた
れなごあはれごけに見たり。

ふごころをりける笛取り出で、吹きをらし。かけもよしをどつゝ
しりうたふ程に。能く鳴る和琴を調べごのへたりけるを。うる
はしくかきあはせたりしほど。けごうはあらずかし。りちの調
は。女の物やはらかにかきならして。簾の内より聞けたるも。今

めきたる物の聲なれば。清く澄める月にをりつきみからず。
男いたくめで。簾のもこに歩み来て。庭の紅葉ころふみわけた
る跡もあけれなご。ねたます。菊を折りて。

琴のねも月もねあらぬ宿ながら。つれなき人をひきやごめけ
る。わづかかんめりなごいひて。今一聲聞きはやすべき人のある時
に。手をのこい給ひろまご。いたくあざれかれば。女いたう聲
つくろひて。

木がらうに吹きあはすめる笛のねを。ひきこむべき言のは
ごあき。ごあまめきはすに。にくなるをも知らで。又箏の琴
を盤渉調に調べて。今めかしくかいひきたるつまれご。かごなき
にはあらねご。まばゆき心地なんま侍りし。
唯時々うち語らふみやづかへひごなごの。あくまでざればみすき
たるは。さても見る限はをかくもありぬべし。時々にて。さ

る所にて忘れぬすがご思う給へんには。たのもしけなくさす
ぐいたりご。心たかれて。うの夜の事にこそつけてころまかりた
ねにか。

この二つの事を思う給へあはするに。若き時の心になに。猶さや
うにもていでたる事は。いと怪しくたのもしけなく覺ゆ侍りき。
今より後は。ましてさのみをん思う給へらるべき。御心のま
に。折らば落ちぬべき萩の露。ひろは。消はなんご見ゆる玉笹の
上のあられまごの。ねんにあねかなるすきくごのみころ。を
かしくたばさるらめ。今さりごも七どせあまりの程に思ひ知り侍
りあん。なにがしが賤いきいさめに。すきたわめらん女には心
たかせ給へ。あやまちして。見ん人のかねくある名をも立てつ
べきものなりと誠む。

中將例のうあづく。君少しかたるみて。さる事は思すべかんめ

り。いつかたにつけても、人わろくはしたをかりける御物語かな
 ごと。うち笑ひたはさうず。
 中將なにかしはしれもの、物語をせんごと。いと忍びて見うめた
 りし人の。さても見つべかりしけはひなりしかば。ながらふべき
 ものごしも。思う給へざりしかど。馴れ行くまゝにあはれごたば
 ぬしかば。たはく忘れぬものに思う給へしを。さばかりになれ
 ば。うちたのめるけしきも見江き。たのむにつけてはうしめしご
 思ふ事もあらんご。心をがら覺ゆる折々も侍りしを。見知らぬや
 うにて。久しきごたはをも。かうたまさかなる人ごも思ひたら
 ず。唯朝夕にもてつけたらん有様に見江て。心苦しかりしかば。
 たのめ渡る事ごもありさか。親もをくいご心ぼろけにて。さ
 らばこの人ころはご。事に觸れかて思へるさまも。らうたけな
 りき。

古今集
塵をだにす

かうのごけきにたたくて。久しくまからざりしころ。この見給
 ふるわたりより。あさけをくうてある事をあん。さるたよりあ
 りてかすめいはせたりける。後にころ聞き侍りしか。さるうき事
 やあらんごも知らず。心には忘れずながら。消息をごもせで久し
 く侍りしに。むけに思ひしをれて。心ぼろかりければ。をさなき
 者なごもありしに。思ひわづらひて。撫子の花を折りてたこせた
 りしごと。涙ぐみたり。さてうの文の言葉はご問ひ給へば。いさ
 や異なる事もあかりきや。
 山がつかさほ荒るごもをりしに。あはれはかけよあで
 このつゆ。思ひ出でしまゝにまかりたりしかば。例のうらもなき
 ものから。いご物思ひがほにて。荒れたる家の露しけきをあがめ
 て。蟲の音にさほるけしき。昔物語めきてれば侍りし。
 咲きまじる花はいづれこわかねごも。猶ごこなつにいくもの

るじとすれ
もふささし
より妹どわ
がぬる床夏
の花

づなき。やまごなでこをばさし置きて。まづ塵をたにまご。親
の心をこる。

ちはらふ袖もつゆけきこなつに。あらふきうふ秋も來
にけり。こはかあけにいひなして。まめくく恨みたるさまも
見ぬず。涙をもらしたこしても。いと耻かしくつましげにまぎ
らはし隠して。つらきをも思ひ知りけり見ぬんは。わりなく苦
しきものご思ひたりしかば。心安くて又またに置き侍りしほど
に。跡もなくころかき消ちて失せにしか。また世にあらばはかな
き世にづさすらふらん。
あはれご思ひし程に。わづらはしげに思ひまつはすけしき見ぬま
しかば。かくもあくがらさぶらまし。こよなきごたに置かず。さ
るものにしあして。長く見るやうも侍りなまし。かの撫子のらう
たく侍りしかば。いかで尋ねんご思ひ給ふるを。今ににころ聞きつ

け侍らね。これころのたまひつるはかあきためしあんめれ。つれ
なくてつらしご思ひけるも知らで。あはれ絶にざりしも。やくあ
き片思をりけり。今やうく忘れ行くきはに。かれはたにしも思
ひ離れず。折々人やりならぬ胸こがる夕べもあらん。ご覺は侍
り。これあんねたもつまじく。たのもしげなき方なりける。
さればかのさがあものも。思ひいである方に忘れ難けれど。さし
當りて見んにはわづらはしく。ようせずはあきたき事もありあん
や。琴の音すめりけんかごくしきも。すきたる罪れもかるべ
し。この心もごなきも疑ひ添ふべければ。いづれごつひに思ひ定
めずなりぬるころ世の中や。唯かくごごりくにくらへ苦しかる
べき。このさまぐのよき限をこりぐし。難ずへきくさはひませ
ぬ人は。いづこにかはあらん。吉祥天女を思ひかけんごすれば。
ほうけづきくすしからんころ。又わびしかりぬべけれど。皆笑

ひ給ひぬ。

式部が所にぞけしきある事はあらん。少しづつ語り申せさせめらる。下がしもの中にはあでふ事か聞しめしごころ侍らん。こいへご。頭の君。まめやかに遅しとせめ給へば。何事を取り申さんご思ひめぐらすに。また文章の生に侍りし時。かしこき女のためしをなん見給へし。かの馬のかみの申し給へるやうに。たほやけごこをもいひあはせ。私さまの世にすまふべき心たきてを。思ひめぐらさん方もいたり深く。ざねのきはあまぐの博士耻かしく。すべて口あかすべくなん侍らざりし。

それは或博士の許に。學問なごし侍るこて。まかり通ひし程に。あるじのむすめごも多かりご聞き給へて。はかなきついでにいひよりて侍りしを。親聞きつけて盃もて出で。わが二つの道うたふを聞けごあん。聞ぬごち侍りしかご。をさくうちこけてもま

白氏文集

主人會良媒。
置酒滿玉壺。
四座且勿飲。

聽我歌兩途。
富家女易嫁。
嫁早輕其夫。
貧家女難嫁。
嫁晚孝於姑。
聞君欲娶婦。
娶婦意如何。

からず。かの親の心をはかりて。さすがにかつらひ侍りし程に。いごあはれに思ひうしろみ。寐覺のかたらひにも。身のざねつき。おほやけにつかうまつるべき道々しき事を教へて。いご清けに。消息文にも。かんをいふものを書きませず。うへくしきいひまはし侍るに。おのづからにまかり絶ねで。ろのものを師としてなん。わづかある腰折文つくる事をご習ひ侍りしかば。今の恩は忘れ侍らねご。なつかしきさいしこうち頼まんに。無才の人。なまわろならぬるまひなご見江んに。耻かしくあん見ね侍りし。まいてきんたちの御爲には。さしもはわぐしくしたかなる御うしろみは。何にかせさせ給はん。はかあしくちをしごかつ見つ。唯我心につき。すくせのひくかた侍るめれば。男しもあん。子細あきものは侍るめるご申せは。残をいはせんこて。さてくをかしかりける女かあご。すらい給ふを。心はねあ

がら。鼻のわたりをこめきて語りなす。
 さていご久しくまからざりしに。物のたよりに立ちよりて侍れ
 ば。常のうちさげ居たる方には侍らで。心々ましき物ごしにてな
 ん逢ひて侍りし。ふすぶるにやこ。をこがましくも。又よきふし
 なりごも思ひ給ふるに。このさかし人はた。軽々しき物ゑんじす
 べきにもあらず。世のたうりを思ひこりて恨みざりけり。
 聲もはやりかにていふやう。月ごろふびやう重きにたへかねて。こ
 くねちのさうやくをぶくして。いごくさきによりあん。に對面さ
 まはらぬ。まのあたりをらずごも。さるべからん雜事らはうけた
 まはらんご。いごあはれにうべくしくいひ侍り。いらへに何ごか
 はいはれ侍らん。唯うけたまはりぬごて。立ち出で侍るに。さう
 くしくや覺ゆけん。この香うせなん時に立ちより給へご高やか
 にいふを。聞き過さんもいごほし。暫し立ち休らふべきにはた侍ら

ねば。けにうのにほひさへ。花やかに立ち添へるもすべなくて。
 にゆめをつかひて。

さ、がにのふるまひしるき夕暮に。ひるますぐせごいふがあ
 やなさ。いがあることづげやご。いひもはてず走り出で侍りぬ
 るに追ひて。

逢ふごこの世をし隔てぬ中あらば。ひるまもなにかまばゆか
 らまし。さすがに口ごくごは侍りきご。しづくご申せば。君
 たちあさましご思ひて。うらごごて笑ひ給ふ。

いづこのさる女があるべき。れいつかに鬼ごころ向ひ居たらめ。む
 くつけき事ごつまはじきをして。いはん方なしご式部をあばめに
 くみて。少しよろしからん事を申せごせめ給へご。これよりめづ
 らしき事はさぶらひやごて。わりぬ。
 すべて男も女もわるものは。わづかに知れる方の事を。残なく見

せ盡さ思んごへるころ。いとほしけれ。三史五經の道々しき方を
あきらかにさごりあかさんころ。あいぎやうなからめ。あごかは
女ごいはんからに。世にある事のおほやけわたくしにつけて。
むひに知らず至らずしもあらん。わざご習ひまねばねごも。少し
もがごあらん人の。耳にも目にもごまる事。じねんに多かるべし。
さるまゝにはまんなを走り書きて。さるまじきごちのをんあぶみ
に。半過ぎて書きすくめたる。ああうたて。この方のたをやかな
らましかばと見ゆかし。心地にはさしも思はざらめご。たのづか
らははくしき聲に讀みなされなごしつゝ。事さらびたり。
これは上臈の中にも多かることごかし。歌よむご思へる人のやが
て歌にまつはれ。をかしきふることをも初よりごりごみつゝ。す
さましき折々よみかけたるころ。物しきごこなれ。返しせねばな
さけあし。いせざらん人は、したあからん。さるべき節會をご。

五月の節に急ぎ参るあした。何のあやめも思ひしづめられぬに。
いならぬ根をひさかけ。九日の宴に。まづ難き詩の心をひめく侍
らし。暇なき折に菊の露をかこあよせ。あごやうのつきなきいご
あみにあはせ。さならでものづからげに後に思へば。をかゝく
もあんべかりけることごの。うの折につきなく目にもごまらぬあご
を。推しはからずよみ出でたる。なか／＼心たくれて見ゆ。萬の
事にあごかはさてもご覺ゆる折から。時々思ひわかぬばかりの心
にては。よしばみなさけたゞざらんあんめやすかるべき。すべて
心に知れらん事をも知らず顔にてあし。言はまほしからん事を
も。一つ二つのふいは過すべくあんあんべかりける。あごいふに
も。君は人ひごりの御有様を。心の内に思ひ續け給ふ。これは足
ずら。又さゝ過ぎたる事あく物し給ひけるかあご。ありがたきに
もいご胸ふたがる。

いつかたによりはつごもあくて。はてぐは怪き事ごもになりて。明かし給ひつ。

源氏讀本二終

語釋

○御ほんじやう頁一…性質。○御物忌頁二…齋戒して外出せず來客にも逢はぬ日。○すみか頁二…妻ご定めて行き通ふ處。○片か頁五…其半分だけの學問もしくは藝術の才。○受領頁七…地方官。ズリヤウご讀むべし。○直衣頁九…貴人装束の一。禮服にはあらず。略服なり。ナホシなれごもノウシの如く讀むあり。○あふささるさ頁一〇…叶うたり叶はなんたりの意。一がよければ又一があしきをいふ。○まめくしきすぢ頁一二…華美をらずして篤實一方ある事。○耳はさみがち頁一二…垂るべき髪を耳のうしろに挟みて見ゆにもなりにも構はぬ有様。○こめきて頁一二…おぼこらしくて。○さうく頁一七…物さびしく。○ひらぎ頁一七…口をたきしやべる。○木の道のたくみ頁一七…大工指物師。○繪所頁一八…禁中にありて畫師の出仕する役所。○蓬萊の山頁一八…仙人の住む島。○すくよかなら

ぬ一八……峨々二一かさかしく聳ゆたるを云ふ。○まほ二〇……完全。○あひ
かたのみ二二……あてのあき頼。○たよび二三……指。○臨時の祭二三……十
一月酉の日に行ほる、加茂の社の祭。官祭なれば禁中より樂人舞
入を遣はさる。○調樂二三……音樂の練習。○壁に背け二四……壁の方
へ火口を向けて人の方へうしろを向くるなり。背壁といふ漢語を
直譯したる詞ゆる無理なるいひかたごあれり。○びきあくべき物
のかたびら二四……對面する時にはまくりあぐる几帳の帷子をい
ふ。○立田姫二五……秋の紅葉を染むる神。○たあばた二五……織物を
司る神。○上人二七……殿上人。○よぎぬ二七……よけられぬ。通らずに
居られぬ。○こばかり二七……暫く。○りちの調二七……調に律呂この
二つあり。○ねたます二八……ねたく思はしむ。口をしがらす。○の
こい二八……残しの音便。○盤渉調二八……六調子の一。バンシキデウ
と讀む。○かたるみて二九……半分ほゝゑみて。○人わろく三〇……人

ぎゝわろく。○さがあもの三三……口やかましく恨みたる女。○吉祥
天女三三……佛法の方にていふ美神。○文章の生三四……大學寮にて
文章の課を學ぶ人。今にていはゞ文科大学學生に似たり。○ふびや
う三六……風の病。○ごくねち三六……極熱にてあつく煮たるをいふ。
○さうやく三六……草藥にて蒜の事。○たいらかに三七……たごなし
く。○三史五經三八……史記。漢書。後漢書と毛詩。尙書。周易。禮記
春秋。

明治三十四年七月十二日印刷
明治三十四年七月十六日發行

定價 金十八錢

不許
複製

校訂者 大和田 樹
東京市牛込區東橫町二十番地

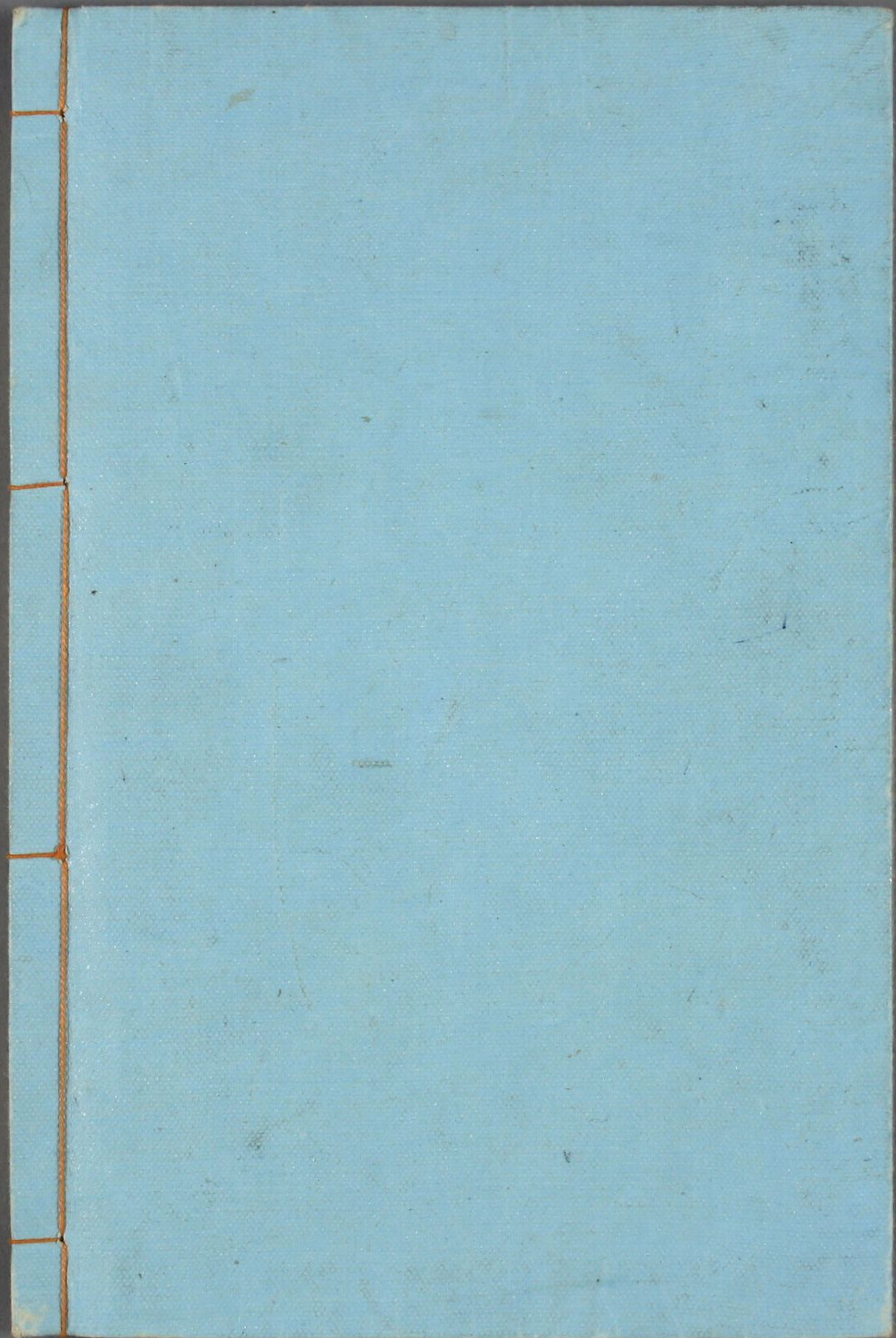
發行者 上原 才一
東京市神田區裏神保町六番地

發行所 上原 書
東京市神田區猿樂町二丁目二番地

印刷者 上村 龍之助
東京市神田區猿樂町二丁目二番地

印刷所 博信 堂
東京市神田區猿樂町二丁目二番地

大賣 東京市日本橋通三丁目
全口橋邊南傳馬町三丁目
大阪市備後町四丁目
京都市東洞院三條東へ入
林 平次郎
目 黒支店
吉岡平助
村上勘兵衛
名古屋市本町三丁目 川瀨代助
仙臺市大町五丁目 藤崎祐之助
長野市大門町 西澤喜太郎
松本本町三丁目 高美書店



大和回建樹大人校訂

源氏讀本

帯本の巻二

東京

跡見女学校藏版

